

私たち一人ひとりに 何ができるの？

～だれもが暮らしやすい町づくりに向けて～

人の暮らしは地域社会の中に存在し、さまざまな人・場所・もの・機会等とのつながりによって成り立っています。これからの地域福祉は、地域住民のニーズに沿って、子どもから高齢者までがともに支え合い、だれもが安心して暮らし続けることのできる町づくりに向けた取り組みが必要です。今、一人ひとりの力が求められています。

＊ 自分だったらどうしてほしい？

病気や障害を有することは、だれにでも起こりうる身近な出来事です。ましてや、高齢化は避けては通れない万人に共通する人生の課題です。今、介護や支援を行っている人も、やがて介護や支援を受ける立場になります。そのとき、自分だったらどうしてほしいかを考え、何が最善かを考えれば、今どうすればよいかが見えてくるのではないのでしょうか。

例えば、関心を寄せる、近所の高齢者と挨拶を交わすなど、それぞれにできることがあります。一人ひとりが自分のこととして考え、自分なりにできることをみつけようとする事自体が、子どもから高齢者までだれもが安心して暮らし続けることのできる町づくりを可能にする貴重な力となります。

＊ 障害のある人や高齢者に対する“まなざし”

人は、年齢・性別・国籍・病気や障害の有無などにかかわらず「かけがえ

のない一人の人」として存在し、日本国憲法においても、だれもが健やかで安心した生活を送ることは基本的な権利とされています。どんなに多くの人があっても、あなたの代わりになる人は存在しません。あなたはかけがえのない一人の人であり、あなたの周囲の人たち一人ひとりに対しても、かけがえのない人として見つめる“まなざし”が大切です。

病気や障害ばかりに目を奪われてしまうと、その人本来の「姿」が見えにくくなってしまいます。病気や障害は、その人がもつ多くの側面の一部であり、ほかにもさまざまな側面（感情・価値観・個性・力・人とのつながり・環境・生きがい・役割・経験など）をもち合わせながら暮らしています。病気や障害を正しく理解することは大切なことですが、その人がもつ多くの側面やその人を取り巻く環境全体に“まなざし”を向けることも欠かせません。

だれしもが自分らしい生活を獲得していくための“力”を秘めています。しかし、障害のある人や認知症高齢者は多くの力を秘めていても、環境が十分に整っていないがゆえにもっている力が発揮しきれていないことがあります。しかし、そういう人たちがもつ力や可能性を生かした取り組み（環境づくりやかかわり）が実践され、単に「介護や支援を受ける人」ではなく、「ものをつくる人、働く人、文化・伝統・技術・生活の知恵を伝える人、学ぶ人、地域を支える人、消費する人、人を癒し助ける人、病気や障害についての理解を地域社会に広げていく人」*として、ともに地域社会を構成する一員であることが理解されるようになってきました。病気や障害をもちながら暮らすことの切実さへの理解を深めるとともに、一人ひとりがもつ「力や可能性」を信じ、見つめようとする“まなざし”がともに支え合うことのできる町づくりの糧となります。

*『認知症グループホームの将来ビジョン2010』日本認知症グループホーム協会 2010 p.24